

■研究十二月往来(403)

室町文化横断研究の展望における宮増小鼓伝書の意味

——『宮増小鼓伝書の資料と研究』刊行によせて——

重田みち

昨年三月、編著『宮増小鼓伝書の資料と研究——室町文化横断研究のために』を刊行した(法政大学能楽研究所国際・学際共同研究成果)。総論「宮増小鼓伝書校訂をとおして室町文化横断研究への扉を開く」、伝書の翻刻校訂、共同研究者の論文、同座談会的覚書等から構成している。能楽をはじめ蹴鞠・花道など諸藝の藝道書(伝書)比較というテーマの着想から三、四十年、ようやく手始めの成果の発表にたどり着いた。能楽伝書とともにこれらの藝道書や中近世の日記類を通読すると、複数ジャンルの藝道書にわたり用語や藝の心得に共通点が見え、日記類にも多様なジャンルの記事が並んでいる。当初から興味深かったが、すぐに論文などの形にするには力不足であり、当時の研究界は複数ジャンルの相互連関という視点を共有する機会も少なかった。時期尚早だったのである。

今回の編著では、室町後期の宮増弥七・弥左衛門兄弟の小鼓伝書を取り上げ、十一種の伝書の資料紹介も行った。宮増伝書を選んだのは単なる便宜のためではなく、室町後期の

文化状況やその研究の在りかたを考えると、藝道書研究のケーススタディとして最適だと見たからである。能楽伝書はその下位分類に能伝書・謡伝書・小鼓などの囃子伝書があり、これまでの専門研究では、能伝書を中心に据え、その脇に謡伝書や囃子伝書を置く認識が強かった。もちろん能楽伝書は世阿弥の能伝書『花伝』から出発する。しかし、能楽伝書の数が格段に増加する室町後期には、能伝書よりも謡伝書や小鼓伝書の数のほうがはるかに優勢になり、様相が一変したことに注意すべきである。謡や鼓は舞台上だけでなく座敷でも楽しむことができ、素人でも享受しやすかった。つまり花や茶と同様の藝になったとも言える。それが謡伝書や小鼓伝書の当時の勢いに関係していたと推測され、この時期の能楽と他ジャンルの藝道書との密接な連関にもつながったことが想像される。

また宮増小鼓伝書は足利義昭・織田信長と縁が深く、信長配下の武家などの間で授受されたことも、数が多いことの一因であろう。「天正九年橋本与太郎景忠奥書小鼓伝書」の伝

受者である那波次郎や、「五月吉日大戸七郎左衛門尉正親筆宮増弥左衛門尉鼓伝書」の書写者である大戸氏について、筆者は総論とこれらの解題に、信長や医師の曲直瀬玄由との関係の可能性を述べた。信長は自身も小鼓を稽古したと見られるが、周囲の武家社会における宮増小鼓伝書の拡がりにも大きな影響を与えたキーパーソンであったと推測される。

さて、この編著の内容に関して、そこに言及しなかった先行説を二点補足しておきたい。一つは、細川護貞氏のエッセイ「茶と能と花——その相互の関係」(『怡園随筆 茶・花・史』、主婦の友社、一九七二、所収)である。細川氏は諸藝の比較や藝道書に関して、『禅鳳雑談』に見える茶の湯や花道の話題に着目し、また室町末期の花道書『仙伝抄』と『八帖花伝書』に、「出陣(門出)」「婿取嫁取」「移徙」「五節句」の機会に関する説が共通して見えることを述べている。さらに『八帖花伝書』の「大夫を花の心に喩へ、役者(大夫以外の囃子方、地謡方、狂言方)を下草に象るなり」など、立花を踏まえた説にも注目している。細川氏の著述は狭義の学術研究ではなく今回の執筆時点では見落としていたが、ここに補っておきたい。重要なのは、細川氏には東アジアの美術・文学・諸藝の教養と、それらを俯瞰する視野の広さがあったからこそ、一九七〇年頃の早い時期にこれらに注目しえたと言えることであり、研究者もその教養を学ぶに値する。ただし同時に学術研究は、諸藝の接点や共通点を概観するにとどまらず、そこから文化史

的考察をどこまで深め、知的に展開できるかが問われていることも忘れてはならないが。

もう一つの先行説は、表章・伊藤正義両氏校注『金春古伝書集成』（わんや書店、一九六九）である。今回の編著の総論では、室町後期の宮増小鼓伝書には候体の文体が多く、「……然るべく候」「……肝要候」などの形式的表現を多用する点が、武家の書状と共通することに注目した。またそれらの伝書には書名もないことから、当時の武家社会における素人宛の能楽伝書は内容的には藝道書であるが、書き物としてのスタイルは『典籍』ではなく書状と同類の（文書）であると述べたところが『金春古伝書集成』の解題には、禪鳳伝書『五音之次第（元安本）』『音曲五音』『囃之事』について、「三種ともに候文体の書状形式の伝書である点に注意せられる」（八五頁）と、書状形式との近似が早くも指摘されている。今回の編著はそれとは文脈が異なるが、見落としていたので補足しておきたい。

今回の執筆は、能楽などの藝道書研究の今後の可能性を模索する機会にもなった。筆者が考える方向性は主に二つある。第一に、二十世紀のすぐれた研究と同様に、本文の翻刻に加えて、校訂・注釈を基盤に解釈を深め、時に翻訳も行うことである。書誌学・文献学上の解題も必要だが、それを超えることからは他日の論考に譲ってもよい。近年、伝書などの資料を翻刻（文字おこし）するだけで、中には句読点も付さないものが増えているが、校訂や本文の構成提示などの本文整理と、注

釈・翻訳こそが、学術研究に値する知的な作業であり、学問水準を維持するための砦であろう。今回は期限の問題もあり注釈など簡略にとどめたが、本文整理が必要だという基本姿勢は示したつもりである。

また第二に、数多く伝存する藝道書資料の本文を、研究や文化活動その他に供するため整理が必要である。二十世紀以来行われてきたそれらの翻刻は主に単行本や雑誌に掲載されたが、現在はそれが蓄積・増大してあちこちに散在している。したがって、どの伝書の翻刻がどこにあるかの全体の把握が容易ではなく、またそれぞれ平板に翻刻されているだけでは、宮増小鼓伝書群のように相互に部分的な説が共通し絡まった糸のように複雑な関係にある能楽伝書同士の本文の比較にも障害が多い。かつてのように「最新の研究成果」に敏感になり人脈を通じて情報を得る「口伝」「秘伝」的対処法が通用するのは小さな世界の内側だけである。参照可能な資料数が増加し、学際・国際的な研究環境が望まれる今日にはそぐわない。そろそろこれらを一括して閲覧または検索しうるデータベースやプラットフォームの構築に取りかかるべき時である。今回の編著では、そのことも視野に入れた。書名がない伝書のラベリング（ID化）の基準を作り、伝書内容の構造（全体のカテゴリ）を分析し、条・単純な伝書・合抄・条細目などの階層に分けて各パートにID記号を付与（ナンバリング）したのは、オンラインでの情報化も念頭に置いて、すべての藝道書資料の

検索や比較参照を可能にする汎用的な基準を作り、今後活かすための土台作りの意味もあった。そのため、藝道書本文の構成の丁寧な分析を期し、どのように構造化するのが最も合理的かという点を重視している。宮増小鼓伝書群の本文構成や書状的なスタイルはその構造化のケーススタディとして好適であり、多くの課題に富んでいる。

人文学的、文化的な書き物の内容の情報化を進めてこれら、筆者が懇意にしている方にクリステイアン・ウィッテルン氏がいる。大蔵経データベースのCBETAや中国文献のプラットフォーム「漢籍リポジトリ」の作成者である。同氏はきわめて人文学的な感性をもっているが、「他に作る人がいない」という理由で、数十年間これら構築に携わり、現在に至る。織物や編物のような根気のいる作業であり基礎的な技術を中心とするため、工学系の研究者が協力するには魅力的でない作成物であることは、かつてその方面の研究者と共同研究した私の経験からも感じることである。しかし人文学研究を行い、藝道書のスタイル・構造・内容を帰納的に考察する歴史的な視点をもっているからこそ、構造化に向いている面もある。文化的な書き物のオンライン活用が立ち遅れている日本であるが、様々な障害があることは認識しつつも、一歩ずつ前進してゆければと考えている。今回の編著の副題「室町文化横断研究のために」は、そのような希望も込めて付けたものである。

（京都芸術大学非常勤講師）